

〈特別寄稿〉

文法の対照研究と異文化理解

井 上 優

はじめに

今日は「文法の対照研究と異文化理解」というテーマで話をいたします。「文法」と「異文化」というと、関係のないものを並べただけのように思われるかもしれませんが、私の中ではこの二つは緊密に結びついています。今日も「文法の対照研究をおこなう際の感覚は異文化理解に役立つ」ということをお話しします。

私は北陸は富山の出身です。高知は初めてですが、私にとって高知のイメージは「南国」です。「北陸」とはずいぶんイメージが違います。実際、高知は晴れの日が多いそうですが、富山は冬はとにかく晴れません。天気予報を見るたびに太平洋側がうらやましくなります。魚も富山はブリですが、高知はカツオです。高校野球も富山はたまにしか勝ちませんが、高知の勝率は全国トップクラスです。高知には坂本龍馬を始めとして歴史上のヒーローが何人もいますが、富山はすぐには思いつきません。とにかく富山とはイメージが違うので、どんなところかと思ってこちらにまいりましたが、来てみるとまったく違和感なく、しっくりきています。このような機会を与えていただき、ありがたく思っております。

対照研究の効用

今高知と富山を少し比べましたが、対照研究は一言で言うと「比べて考える」研究です。二つのものをあれこれ比べながら、どこが似ていてどこが違うかを観察し、類似や相違の背景にある事柄について考えるのが対照研究です。「比べて考える」ことを通じて、二つのものを公平に見る一般的な視点を見出す研究と言ってもよいと思います。

私の専門は現代日本語の文法研究ですが、日本語と中国語、韓国語との対照研究もやります。それは研究をおこなう上で「比べて考える」ことに三つの効用があるからです（井上2006）。

第一に、「比べる」ことは「よく観察する」ことにつながります。日常生活では「一見同じように見えるが、よく見たら違う」、「一見違うように見えるが、よく見たら似ている」ということをしばしば経験します。買い物です

るときも、「どちらがいいか」と迷って値段や性能などを細かく比べることがよくあります。「比べる」ことにより「よく観察」しているわけです。

第二に、「比べる」ことにより「重要な特徴を際立たせる」ことができます。我々は文化や世代に関係なく「〇〇人はこうだが、××人はこうだ」、「我々の若い頃はこうだったが、最近の若い連中は…」といった比較をよくやります。二つのものを対比させることにより、それぞれの特徴が明確に浮かび上がるからです。比較広告はまさにこの効用を利用しています。子どもを叱るときも、他の子どもと比較するのはよくないと言いますが、ついつい「〇〇ちゃんはこうなのに、あんたは…」のように言ってしまいます。口であれこれ説明するよりも、他者と比較したほうが相手の問題点を明確に指摘できるからです。

第三に、「比べる」ことは「全体の中での位置づけを知る」ことでもあります。試験のときは他の人の点数が気になります。自分が全体の中でのどのような位置にあるかが分らないと、自分の点数の価値が分らないからです。言語でも、日本語の感覚ではあたりまえのことだが、他の言語の感覚では決してあたりまえではないということはよくあります。逆に、一見日本語独自の特徴のように見えても、実は世界の言語でごく普通に見られる事柄であったりもします。

このように、「比べる」ことには、「よく観察する」、「重要な特徴を際立たせる」、「全体の中での位置づけを知る」という三つの効用があります。言語の対照研究は、この三つの効用を生かす形で、それぞれの言語についてより深く理解し、二つの言語を公平に見られる一般的な視点を見出すということをおこなうわけです。

対照研究で大切なこと（１）：自分が実感できる事柄と関連づける

言語の対照研究をおこなう際に最も重要なことは、「自分が実感できる事柄と関連づけて最大限具体的にイメージする」ということです。

対照研究では、自分の母語と自分の母語ではない言語を比べるのが一般的です。このうち、自分の母語のことは実感として理解できます。例えば、私の母語は日本語ですから、日本語については「この言い方は不自然ですよ」とか「この表現とこの表現は意味が少し違いますよね」とか言われれば、自分の語感と照らしあわせて、「確かにそうだ」と同意したり、「そうかなあ」と疑問を抱いたりすることができます。しかし、外国語の場合はそういうわ

けにはいきません。「この言い方は不自然です」とか「この表現とこの表現は意味が少し違います」とか言われても、実感としては分かりません。そこで「自分が実感できる事柄と関連づけて考える」ことが必要になります。

以下では、「自分が実感できる事柄と関連づけて考える」ということの具体例として、(i)自分の母語と関連づけて考える、(ii)比喩を活用する、という二つのことを述べたいと思います。

中国語の“对 dui”、“对了 duile”

まず、「自分の母語と関連づけて考える」ということについて説明します。

中国語の応答表現に“对 dui”、“对了 duile”という表現があります。どちらも「そうです」と訳せる表現ですが、この二つは意味が違います。

まず、(1)のように、相手の発言に「そうだ。そのとおりだ」と賛同する場合は“对”です。

(1) (相手がよいアイデアを出したのを聞いて)

对, 对, 对, 就 这么 办 吧。(そうだ、そうだ、そうしよう)
そうだ そうだ そうだ それで十分 そう する よう

“对”は“对, 对, 对”と3回言うことがよくありますが、日本語で「そうだ、そうだ、そうだ」と言うのはくどいので、「そうだ、そうだ」としてあります。ちなみに、ドアのノックも日本では2回ですが、中国では3回です。

次に、(2)のように、正解が出たことに対して「そうです。それです」という気持ちで言う場合は“对了”です。

(2) (クイズ番組で。ようやく正解が出たのを受けて司会者が)

对了, 小王 猜对了。(そうです。王さんが正解です。)
そうです 王さん 推測する-正しい-完了

(3)のように、思い出せずにいたことを思い出して、「そうだ。これだ」という気持ちで言うときも“对了”です。

(3) (思い出せずにいたことを思い出して)

对了, 我 还 有 一 件 事 要 跟 你 说。
そうだ 私 まだ ある 一つ 事 たいに 君 言う
(そうだ。君に伝えたいことがあるんだった。)

“对”と“对了”の意味はどう違うのでしょうか。実はこの二つの意味の違いは中国語を知らなくても分かります。次のように考えればよいのです(黄

2000)。

- ・“対” : それは正しい (そのとおりだ)。
- ・“对了” : それ (これ) が正しい (正解はそれ (これ) だ)。

“対”は相手の発言を「そう、それは正しい (そのとおりだ)」と評価することを表します。一方、“对了”は正解がその場に出現したことを表します。相手が正解を言ったことを受けて「そう、それが正しい (それだ)」と指摘する、あるいは、正解を思い出して「そうだ、これが正しい (これだ)」と言うときに“对了”と言うわけです。日本語で「それは」と「それが (これが)」の違いで表される意味の違いが、中国語では“了”の有無で表されるわけです。相原ほか(2000)には「“对了”を同等の者や目上の人用いるのは避けなければなりません」という説明がありますが、それも日本語で「そう、それが正しい (そう、それです)」と言うと少し尊大な感じがすることを考えれば、実感として分かると思います。自分が実感できる言語の類似の現象と結びつけて考えれば、母語ではない言語の感覚もそれなりに実感できるわけです。

中国語の「鸚鵡返し」的応答

次に、「比喻を活用する」ということについて説明します。

日本語では、「来るか？」という問いに Yes と答える場合は「行く」と答えます。相手の視点からは「来る」ですが、自分の視点からは「行く」なので、「行く」と答えるわけです。一方、中国語では、“来不来？”(来るか?)と聞かれてすぐ Yes と答える場合は“来”(来る)と言います。中国語も、日本語と同様、相手のところに移動することは基本的に“去”(行く)と言いますが、“来不来？”と聞かれてすぐ Yes と答える場合は“来”です。“来”(来る)と“不来”(来ない)という二つの選択肢を示されたので、そのうちの“来”を選択して“来”です」と答えるわけです。要は「二択問題」です。

類似の例をもう一つあげます。北京のレストランに行くと、店員が“几位？”(何名様?)と聞いてきます。“位”は敬称の助数詞で「…名様」という感じです。敬称ですので、店員が客に対して“位”を使うのは分かりますが、中国語では客のほうも“三位”(3名様)のように答えます。日本語の感覚では、敬称である“位”を自分たちに使うのは不思議な感じがしますが、これも一種の「穴埋め問題」と考えれば容易に理解できると思います。店員が“()位？”と聞いたので、括弧の部分に数字を入れて“三位”です」と答える

わけです。

中川(2005)は、中国語のこれらの現象を「相手が言った形式に反応して鸚鵡返しの如く応答する」と説明しています。この感覚は日本語にはないので、日本語母語話者には実感しにくいのですが、「二択問題」「穴埋め問題」と考えれば、それほど不思議ではないという感じがすると思います。考えようによっては、日本語で「鸚鵡返し」的な応答ができないことの方が不思議だという気もしてきます。比喩を活用することにより、「外国語の不思議な現象」と見えていたことが「あってもおかしくない現象」に見えてくるわけです。

中国語の形容詞文の不思議な性質

比喩の活用 of 例をもう一つあげます。中国語の形容詞文について、中国語教育では次のような説明がおこなわれます。

中国語の形容詞は述語になれますから、“这个贵”と言えます。ところがこの文は「これは〈値段が〉高い」という意味にはならず、「これは〈値段が〉高い(けど、あれは安い)」というように()の中の意味が言外の意味として含まれてしまいます。

このように中国語の形容詞は、それだけで述語になると比較・対照のニュアンスを表す、という不思議な性質があります。“今天很热”(今日は暑いですね)のように、形容詞の前に副詞“很 hen”を加えると、比較・対照のニュアンスが消えます。“很”はもともと「とても～、たいへん～」という程度を表す副詞ですが、軽く発音された“很”には程度を強めるはたらきはなく、形容詞が述語となるための安定剤のはたらきをします。

(守屋1995:44, 一部表記改変)

この説明は一見とても不思議な感じがします。なぜ形容詞を単独で述語として用いると比較・対照の意味が生ずるのか、また、“很”(とても)は比較・対照の意味を消すだけで「程度を強めるはたらきがない」というのはどういうことか、日本語の感覚からすると不思議なことばかりです。

もっとも、不思議なことばかりというのは、見方を変えれば、ある一点が分かればドミノ倒しのようにすべてのことが分かるという可能性も高いということです(この感覚は対照研究をおこなう上でとても重要です)。ここでは、

次のように考えれば分かりやすいと思います。

まず、次の例を見てください。

(4) 这幅 画 跟 那幅 画 一样 大。(“大”=大きさあり、≠大きい)

この 絵 と あの 絵 同 じ 大 き い

(この絵はあの絵と同じくらいの大きさだ(×同じくらい大きい))。

(4)が表すのは、「この絵はあの絵と同じくらい大きい」ということではなく、「この絵はあの絵と同じ大きさがある」ということです。この場合、「大」が表すのは「大きさあり」ということだけです。「同じ大きさがある」というだけですから、両方とも小さいということもありえます。

このように、中国語の“大”は「大きさあり」ということしか表しません。日本語の「大きい」は「『大きい』と言えるだけの程度の大きさがある」ということを表しますが、中国語でそれを言うには「『大きい』と言えるだけの程度である」ということを述べなければなりません。そのために用いるのが“很”(とても)です。“很大”の“很”は「大きい」という大きさを具体的に描き出すための表現です(井上(印刷中b))。“很”に「程度を強めるはたらき」がなく、「形容詞が述語となるための安定剤のはたらき」をするというのはそういうことです。

日本語の「大きい」は程度の意味を含み、中国語の“大”は「大きさあり」というだけで程度の意味を含まないというのは、次のような比喩で考えればより分かりやすいと思います。

まず、美術館に絵が飾ってある情景を写した(5a)と、「世界名画全集」にあるような絵だけの写真(5b)を見てください。

(5) a.



b.



(5a)のように空間の中に絵があれば、背景や人との比較で絵が「大きい」かどうかが分かります。これが日本語の「大きい」の感覚です。一方、(5b)

は絵しか写っていませんから、「大きさあり」までは分かっても、「大きい」かどうかは分かりません。実際、展覧会で絵の現物を見て、「世界名画全集」の写真からイメージしていた大きさと違っていて驚くということをしばしば経験します。「大きい」ということを言うには「『大きい』と言えるだけの程度である」ということを明示的に言わなければならない。これが中国語の“很大”の感覚です。

こう考えると、中国語で形容詞を単独で用いた場合に比較・対照の意味が生ずる理由も分かります。2枚の絵を並べた(6)を見てください。それぞれの絵の大きさは分からなくても、2枚並べれば「こちらは大、こちらは小」という分類はできます。程度を限定せずに形容詞を用いた場合は「分類」を表す。これが「中国語の形容詞はそれだけで述語になると比較・対照のニュアンスを表す」ということです。

(6)

大



小



中国語の形容詞文の感覚は日本語母語話者には分かりにくいところがあります。しかし、比喩を適切に使えば、中国語の感覚はそれなりにイメージできます。比喩が物事を理解するのに有効な手段であることが分かっていただけだと思います。

対照研究で大切なこと（2）：最小限の違いで説明する

ここまで、対照研究をおこなう際に大切なこととして、「自分が実感できる事柄と関連づけて最大限具体的にイメージする」ということを述べました。次に対照研究において大切なもう一つのことを述べたいと思います。

私は文法研究者です。文法研究者のモットーは「最大限シンプルに説明する」です。一見複雑に見えても、少しずつ解きほぐしていけばシンプルな法則性が見えてくるはずだ。これが文法研究者の信条です。対照研究の場合、この信条は「最小限の違いで説明する」ということにつながります。裏を返

せば「最大限同じと見る」ということです。「一見いろいろ違うように見えるが、つまるところはある一点が違うだけだ」、あるいは「一見大きく違うように見えるが、実はある一点が違うだけだ」と考えるわけです。この感覚は対照研究において非常に重要ですし、後で述べるように、異文化について考える際にも重要です。以下、「最小限の違いで説明する」ということについて、具体例をあげて説明します。

動詞の非継続形と継続形の使い分け

日本語の動詞には非継続形と継続形があります。「スル／シタ」が非継続形、「シテイル／シテイタ」が継続形です。韓国語にも「スル／シタ」にあたる非継続形と「シテイル／シテイタ」にあたる継続形があります。動作継続を表す形（-ko issta：ている）と結果状態を表す形（-e issta：ている）が異なるということはありますが、いずれも存在動詞「issta」（いる・ある）を使った表現である点は日本語と同じであり、日本語母語話者には覚えやすい表現です。

ただ、日本語と韓国語では非継続形と継続形の使い分け方が少し違います。大まかに言えば次のようになります（井上・生越・木村2002）。

- ・日本語：非継続形は「時間の流れに沿った過程を述べる」という動的な意味が強く、使用可能な文脈が限定される。それをカバーする形で継続形が使用される文脈が相対的に広がっている。
- ・韓国語：韓国語の非継続形は「こういう動作がある（あった）」ということだけを述べるだけで、動的な意味は強くない。それゆえ、基本的には非継続形を使えばよいことが多く、継続形が用いられる文脈は限定される。

非継続形と継続形は対をなす表現であり、出来事を述べる際には非継続形と継続形のどちらか一方を選ぶ必要があります。日本語では非継続形が使いにくいので、継続形がそれをカバーしているが、韓国語では非継続形が使いやすいので、継続形は限られた場合にしか用いられない、というように、日本語と韓国語とでは非継続形と継続形の使い分けのバランスが逆になっています。以下具体例をあげて説明します。

まず、動作継続を表す「テイル」と「-ko issta」（ている）について見ます。

- (7) a. 日本に来る前は、何をしましたか？
 b. 日本に来る前は、何をしていましたか？
 c. ilpon-ey o-si-ki cen-ey-nun, mwues-ul hasyess-supnikka?
 日本-に 来られる 前-に-は 何-を されましたか

- (8) (来日直前まで従事した職業を述べる)
 a. 大学で日本語を教えていました (#教えました)。
 b. tayhak-eyse ilpone-lul kaluchyess-supnita.
 大学-で 日本語-を 教えました

日本語の非継続形は「時間の流れに沿った過程を述べる」という動的な意味が明確です。(7a)のように「日本に来る前は何をしましたか？」と言うと、来日までの経過や経歴を問う文になります。答えも「日本に来る前は、これをして、あれをして、そして日本に来ました」という感じの答えになります。経過や経歴ではなく、来日直前まで従事した職業や身分を聞く場合は、(7b)のように「何をしていましたか？」と言う必要があります。答えるときも(8a)のように「大学で日本語を教えていました」のように継続形を使います。

一方、韓国語の非継続形は「こういう出来事がある(あった)」というだけで、特に動的な意味を含みません。韓国語では、来日直前まで従事した職業や身分を聞く場合も、(7c)の「何をされましたか？」にあたる言い方で十分です。答えるときも(8b)のように「大学で日本語を教えました」のように言えばよく、わざわざ「教えていました」のように言う必要はありません。日本に来るまでの間大学で日本語を教えたという事実があるわけですから、「教えた」でよいわけです。

次の例も見てください。(「#」は「文法的には可能な表現だが、当該の文脈での使用が不自然である」ことを表します。)

- (9) (待ち合わせ場所に遅れてやってきた妻が、先に来ていた夫に)
 a. ごめんね。銀行でお金を {# おろしたの／おろしてたの}。
 b. unhayng-eyse ton-ul {chac-ass-eyo/#chac-ko iss-ess-eyo} .
 銀行-で お金-を 引き出しました 引き出して いました

日本語の場合、(9)の文脈では「おろした」は不自然で、「おろしていた」が自然です。妻としては「お金をおろすのに時間がかかったために遅れた」ということを言いたいわけですが、非継続形を使って「銀行でお金をおろしたの」、あるいは「銀行でお金をおろしちゃったの」のように言うと、「お金

をおろさなければ時間に間に合ったのに、お金をおろしたために遅れた」という意味になってしまいます。(9)ではそういうことを言いたいのではないので、動作継続形「おろしていた」を用いることになります。

韓国語はこれと逆で、(9)の文脈では「銀行でお金を引き出しました」と言い、「引き出していました」は不自然です。「引き出していました」が自然に使えるのは、次のように具体的な場面指定をした上で述べる場合です。

(10) (「さっき銀行で何をやっていたの?」と聞かれて)

- a. お金をおろしてたの (おろしていたところだったの)。
- b. ton-ul chac-ko iss-ess-eyo.

お金-を 引き出して いました

韓国語文(10b)は「さっきは銀行でお金をおろしていたところだった」くらいの意味です。場面を指定して「あの場面はこういう状態であった」ということを説明するわけです。日本語でも、(9)のように場面指定のない文脈で「…していたところだった」を用いて、(11)のように言うのは不自然ですが、韓国語の動作継続形「chac-ko iss-ess-ta」(引き出していた)が不自然なのもこれと同じ理由によります。

(11) (待ち合わせ場所に遅れてやってきた妻が、先に来ていた夫に)

#ごめんね。銀行でお金をおろしてたところだったの。

韓国語では、非継続形が使いやすい分、継続形は限られた場合にしか用いられないわけです。

現在を表す「スル」形と「hanta」形

日本語と韓国語の動作継続形の意味の違いは、非過去の場合にも観察されます。

(12) (何かやっている相手に)

- a. 何を {しているんですか / #しますか} ?
 - b. mwe {haseyyo / ha-ko kyeyseyyo} ?
- 何 される して いらっしゃる

(13) (眼前で雪が降っているのを見て)

ya, ches-nwun-i nayli-nun-kwunyo. (やあ、初雪が降っているよ。)

やあ 初雪-が 降るよ (『コスモス朝和辞典』第2版)

韓国語を勉強するとすぐに習うことですが、日本語の「スル」形にあたる韓国語の「hanta」形は現在の動作を表すことができます。(12)、(13)のように

眼前で起こっている出来事を述べる時も「hanta」形が使えます。韓国語の非継続形は「こういう出来事がある（あった）」というだけで、特に動的な意味を含まないので、このようなことができるわけです。(12)、(13)では継続形も使えますが、その場合、「…しているところだ」に相当する場面説明的な意味が強くなります。

一方、日本語で「何をするの?」、「初雪が降るよ」と言うと、未来の出来事を述べる文になります。日本語でも眼前で起こっていることを「スル」形で述べることはありますが、それは次のように事態が展開していく過程を実況中継的に述べる場合です。この場合、「スル」形の動的な意味が非常に明確です。

(14) ぐんぐん打球はのびる。センター、バックする。

(15) (餅を手でのばしたら、どんどんのびていく)

お、のびる、のびる (#のびてる、のびてる)。

日本語の「スル」形はこのように動的な意味が明確なので、眼前の出来事を「事態が展開していく過程を実況中継的に述べる」のではない形で述べる場合は、継続形「シテイル」を用いることになります。日本語の非継続形は「時間の流れに沿った過程を述べる」という動的な意味が強いので、それを消したいときには「シテイル」を使うわけです。韓国語で非継続形が使いやすく、継続形は限られた場合にしか用いられないというのは、ちょうど逆の関係になっています。

「シタ」と結果状態「シテイル」

日本語と韓国語で非継続形と継続形の使い分けのバランスが逆になっているというのは、結果状態を表す継続形の場合も同じです。

道に誰のものか分からないお金が落ちているのを見つけたという場面を想像してください。その場合、日本語では「あ、お金が落ちてる」と言います。「お金が落ちた」とは言いません。

(16) (道に誰のものか分からないお金が落ちているのを見つけて)

あ、お金が {落ちてる／#落ちた}。

過去のある時点で「落ちる」ということがあったことは確かですが、話し手はその過程をまったく知りません。話し手が知っているのは眼前の「落ちている」という結果状態だけなので、「落ちている」としか言えないわけです。

一方、韓国語は同じ文脈で「落ちた」にあたる表現を使うことが可能です。

(17) (道に誰のものか分からないお金が落ちているのを見つけて)

a. e, ton-i ttelecye iss-ney.

お金-が 落ちて いる-詠嘆

b. e, ton-i ttelecyess-ney.

お金-が 落ちた-詠嘆

「落ちている」にあたる表現を用いた(17a)は、眼前の状態を第三者的な立場から観察しているというニュアンスの文です。一方、「落ちた」にあたる表現を用いた(17b)は、眼前の状態を見て「予想もしなかった状況が出現した」という気持ちで述べる文です。第三者的な立場から観察しているというよりは、「儲かった!」、「どこかに届けなきゃ」という気持ちを伴った発話です。

次の例も同じです。

(18) ニューカーヒル俗離山ホテル207号から引き裂くような男の悲鳴が聞こえて来た。

「ひ…ひとが 死んでる (#死んだ) …ひ…。」(日本語訳)

salam-i cwuk-ess-eyo (原文) (浜之上1992)

人-が 死にました

日本語では、眼前の人が死んだ経緯を知らない場合は「死んでいる」としか言いようがありません。韓国語でも、人が死んでいることを他人に報告する場合は「死んでいる」にあたる形を使いますが、「予想もしなかった状況が出現した」という気持ちを感じた瞬間には「死んだ」にあたる形を使います。韓国語の継続形は、動作継続を表す場合も結果状態を表す場合も場面説明的な意味が強いので、「予想もしなかった状況が出現した」という気持ちで述べる時は非継続形のほうがよいわけです。変化の過程を知らず眼前の状態しか知らない場合は「シテイル」としか言いようがない日本語とは、非継続形と継続形の使い分けの感覚が異なることが分かっていただけたと思います。

「シタ」と経歴・記録「シテイル」

日本語の「シタ」の使いにくさは次のような例にも現れます。

(19) A: Bさん、先月『対照言語学入門』という本を注文されましたよね。

B: え? そんな本注文したっけ?

A: (注文用ハガキを見せて) これ、Bさんの字ですね。

B：本当だ。確かに先月注文してるねえ（#注文したねえ）。[経歴・記録]
cwumwun-hayss-ney.

注文-した-詠嘆

あ、そういえば、何かそんなタイトルの本を注文したなあ

cwumwun-hayss-ess-ci.

注文-した（大過去）-詠嘆

(19)は、Bさんが注文した記録（注文用ハガキ）はあるが、Bさんの記憶には注文したというイメージがないという文脈です。この場合、日本語では「注文した」ではなく「注文している」と言います。この種の「シテイル」の用法は「経歴・記録」用法と呼ばれ、動作継続や結果状態を表す用法とは別の用法です。ここで重要なのは、注文した記録しかなく、注文の過程がイメージできない文脈では非継続形「注文した」が使いにくいということです。日本語の非継続形は「時間の流れに沿った過程を述べる」という動的な意味が強いので、注文の過程を思い出せば「注文した」と言えますが、注文した記録（結果の一種）しかない場合は「注文している」としか言えないわけです。

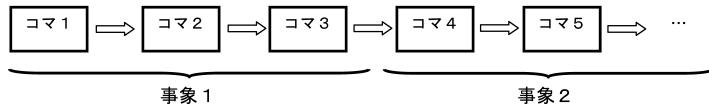
韓国語の継続形には「経歴・記録」の用法はありません。注文した記録しかなく、注文の過程がイメージできない文脈でも、「注文した」ことを示す記録があるわけですから「注文した」と言います。韓国語の非継続形は「時間の流れに沿った過程を述べる」という動的な意味が弱く、日本語の非継続形よりも広い文脈で使えます。そのため、継続形に「経歴・記録」の用法を担わせる必要がないのです。

アニメーション型とスライド型

以上述べた、非継続形と継続形の使い分けに関する日本語と韓国語の感覚のずれは、「アニメーション」と「スライド（紙芝居）」にたとえて説明することができます（井上(印刷中 a)）。

日本語の非継続形「スル／シタ」は「時間の流れに沿った過程を述べる」という動的叙述性が明確です。日本語は時間の流れに沿った動きを述べるアニメーション的な述べ方が基本であり、動きの意味を出したくない場合は継続形「シテイル」を用いることになります。

(20) 日本語のイメージ



一方、韓国語の非継続形は「こういう出来事がある（あった）」というだけで、特に動的な意味を含みません。韓国語はスライドや紙芝居のように「一つの出来事の全体を総括して述べる」のが基本であり、継続形を用いるのは1枚のスライドを取り上げてその内部を詳しく説明する場合です。

(21) 韓国語のイメージ



日本語と韓国語の動詞は、非継続形と継続形が対になっている点は同じです。また、非継続形が一つの出来事の全体に言及する表現、継続形が出来事の一部を状態として取り上げる表現である点も同じです。ただ、日本語の非継続形は一つの出来事の全体をアニメーションのように時間の流れにそった過程として述べますが、韓国語の非継続形は一つの出来事の全体をスライド（紙芝居）のように一つの存在物として述べるだけです。非継続形のこのような意味の違いが、日本語と韓国語の非継続形と継続形の役割分担のずれをもたらしているのです。

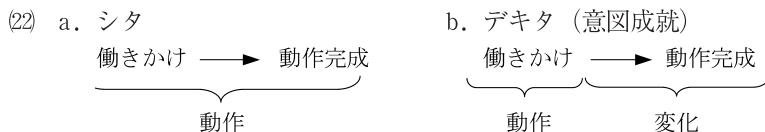
「シタ」と意図成就「デキタ」

「アニメーション型」、「スライド型」という違いは、非継続形と継続形の使い分け以外にもさまざまな違いとして現れます。可能形の用法に関するずれもその一つです。

電車でやっとあいた席に腰かけたとき、日本語では「やっと座れた」のように可能形を使います。この場合、「やっと座った」とは言いません。運よくバスの出発時間に間に合ったときも、「運よくバスに乗れた」と言い、「運よくバスに乗った」とは言いません。可能形のこのような用法は「意図成就」（尾上1999）と呼ばれます。韓国語の可能形にはこのような意図成就の用法はないと言ってもよいと思います。実際、韓国語では、電車でやっとあいた

席に腰かけたとき、運よくバスの出発時間に間に合ったときは、「やっと座った」、「運よくバスに乗った」という言い方で十分です。

日本語の「座った」は、「自分から座った」、すなわち「座る動作を実現させた」ことを表します。一方、意図成就の「座れた」は、動作をする意思はあったが、動作の実現自体は自分の意思とは別に結果として発生したことを表します。「シタ」は「結果を出した」ことを表し、意図成就の「デキタ」は「結果が出た」ことを表すわけです。「シタ」は全体を「動作」として述べる表現、「デキタ」は半分「動作」、半分「変化」として述べる表現とも言えます。両者は結果は同じですが、過程としては違うので、日本語では両者を区別するわけです。



韓国語ではこのような区別はしません。韓国語の「シタ」にあたる非継続形は一つの出来事の全体をスライド（紙芝居）のように一つの存在物として述べるだけです。(22a)と(22b)は過程は違いますが、結果は同じなので、両者は区別されないわけです。

複合動詞の構造

複合動詞の作り方も日本語と韓国語では少し異なりますが、それも「アニメーション型」「スライド型」という時間感覚の違いとして説明できます。

日本語の複合動詞は、「動作→結果」という時間の流れにそった過程を述べる形で作られるのが一般的です。例えば、「着替える」は「別の服を着た→服が変わる」、「書き分ける」は「書き方を分けて書く→書き方が分かれる」という述べ方になっています。「聞き流す」も「聞く動作が流れる形で終わる」、「食べ過ぎる」も「食べる動作が度が超した形で終わる」という述べ方です。アニメーション的な感覚で「動作がこうなる」と言う形で言うわけです。

一方、韓国語の複合動詞は身体動作そのものを述べる形で作られます。日本語の「着替える」「書き分ける」は、韓国語では「替えて着る」「分けて書く」という逆の言い方になります。「着替える」は要するに「別の服を着る」わけなので「服を替えて着る」、「書き分ける」は要するに「別々の形で書く」

わけなので「分けて書く」となるわけです。「着替える」「書き分ける」動作を1枚の絵で書くと「服を着る」「書く」動作を書くことになるのと同じことです。「聞き流す」「食べ過ぎる」も韓国語では「流して聞く」「過ぎて食べる」と逆の言い方になります。これも、スライド的な感覚ではこれらの動作が「聞く」「食べる」ことだからです。

過去形の使い方

過去形の使い方も日本語と韓国語では違います。そして、その違いはやはりアニメーション型（日本語）、スライド型（韓国語）という違いとして説明できます。

(23) (子供が生まれて、病院から実家に電話をかけた。子供の性別を聞かれて)

- a. 男だよ。／男だったよ。
- b. atul-ieyyo.／#atul-i-ess-eyo.
男の子です 男の子でした

日本語では、生まれた子どもの性別を「男だった」のように言えます。子どもはもちろん生きているわけですが、「男だった」という表現はごく自然に成立します。ここで過去形を用いるのは、「生まれた子どもを見たら、男であるのが見えた」ということを述べたいからです。子どもが男であることは現在の事柄ですが、それとは別に「子どもが生まれたときに見えたことを報告する」ので、「男だった」となるわけです。

一方、韓国語では(23)の文脈で「男だった」のように言えません。子どもが男であることは現在の事柄なので現在形を使います。「子どもが男である」とことは別に「子どもが生まれたときに見えたことを報告する」ということが韓国語ではできないのです。同じように、日本語では食事を終えた直後に「ああ、おいしかった」と言えますが、韓国語では、食べるという場面でなくなった後に味について評価するという感覚でないと「おいしかった」とは言えません。「おいしい」という感覚が残っている段階で「おいしかった」とは言えないわけです。

次の例も同じです。

(24) (マラソンでトップの選手の姿が見えた。走ってくる選手を見ながら)

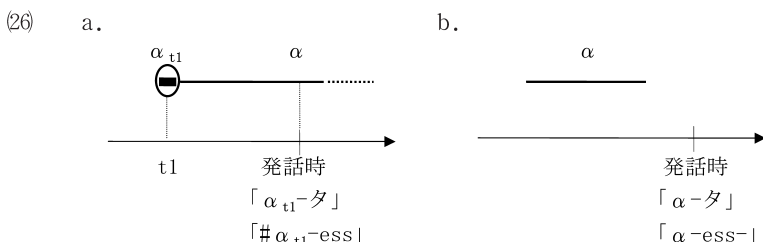
- a. 来た。
- b. o-nta.／#wass-ta.
来る 来た

(24)はマラソンのトップの選手が見えたという文脈です。日本語では「来るのが見えた」という意味で「来た」と言えます。一方、韓国語はこの文脈では「来る」です。「来るのが見える」から「来る」と言うわけです。韓国語でも、(25)のように「やっと来た」という気持ちであれば「来た」と言えますが、「来る」のを見ながら「来た」と言うのは不自然です。

(25) (なかなか来なかったバスがようやく来た。「やっと来た」という気持ちで)

- a. (やっと) 来た。
b. (kyewu) wass-ta. [眼前の移動に関心なし]
やっと 来た

このように、日本語では、ある事柄の存在が判明したときに観察されたことをすぐに過去のこととして述べることができます。ある事柄の存在が分かったときにそれを写真に撮って、その写真を「このような状態が観察された」という形で述べるというイメージです。図示すると(26a)のようになります。アニメーションのように時間が過ぎていく中で述べるという感覚です。



日本語の過去形は、(26b)のように、当該の事柄が終結し、場面が変わった後で用いられることもあります。韓国語の過去形はもっぱらこの形で用いられます。場面が変われば過去形が使えるという感覚です。

日本語と韓国語の文法はとてもよく似ていますが、よく見ると細かいところではけっこう違ってきます。しかし、その中には「アニメーション型」、「スライド型」という違いで一括して説明できるものが少なくありません。「一見いろいろ違うように見えるが、つまるところはある一点が違うだけ」というわけです。

話し手自身に対する敬称使用

「最小限の違いで説明する」ということについて、今度は「一見大きく違うように見えるが、実はある一点が違うだけ」という例について述べたいと思います。取り上げるのは「話し手自身に対する敬称使用」という現象です。

中国語では、親しい友人に電話をかけるときに、

(27) 喂, 我是老黄。

もしもし 私だ 黄さん

のように、自分の名字に“老”、日本語で言えば「さん」をつけた言い方で名のることがよくあります。人に呼びかけるときに“老黄”(黄さん)のように言いますが、同じ表現を自分が名のときにも用いるわけです。日本語で「*私は黄さんです」と言うのは不自然ですが、中国語の“我是老黄”はごく自然な表現です。

北京に住んでいるときに、子どもが通っていた小学校の先生からもらった手紙の冒頭に、

(28) 你好! 我是边老师。

こんにちは 私です ピエン先生

と書いてあったこともあります。先生から研究授業の資料のワープロ入力を頼まれたのですが、その原稿に同封されていた手紙の冒頭がこれでした。日本語の感覚では、自分のことを“边老师”(ピエン先生)と呼ぶのは不思議な感じがしますが、これも中国語では自然な言い方です。

部下に電話をかけるときも、

(29) 喂, 我是王部长(王主任)。

もしもし 私だ 王部長 王主任

のように、自分に“部长”、“主任”のような役職名をつけたりします。中国では日本の「〇〇省」を“〇〇部”と呼びます。(29)の“我是王部长”も、元大臣が自分の元部下に電話をするという場面をイメージしていただければよいと思います。“主任”も組織のトップを表すことが多く、日本語の「主任」とはずいぶんイメージが違いますが、いずれにせよ、日本語では自分のことを「王部長」「王主任」のように言うのは不自然ですが、中国語では自然な表現です

中国語のネイティブに「なぜ自分に敬称を使うのか」と聞くと、「“老”や“老师”は敬称というよりは親しみの表現だからだ」という答えが返ってきます。しかし、自分に親しみの表現を使うというの、自分に敬称を使うの

と同じくらい不思議な感じがします。それをネイティブに言うと、今度は「“老师、部长、主任”は職名であって敬称ではないからだ」と言います。しかし、もし“老师、部长、主任”が単なる職名であれば、同じく職名を用いた“*我是王副主任”、“*我是王教师”のような言い方もできそうなものですが、これらは不自然です。日本語には「呼びかけに使えない呼称は他称詞として使えない」という制約があります。例えば、社員が部長に「部長、これ部長にさしあげます」と言うことはできますが、部長が社員に「*社員、これ社員にあげるよ」とは言えません。これと似た感じで、中国語では「呼びかけに使えない呼称は名のりにも使えない」という制約があります。実際、日本語で「*王教师」と呼びかけられないのと同じように、中国語でも“*王教师”と呼びかけることはできませんし、“*王副主任!”と呼びかけるのも失礼で不自然です。それと同じように自分のことを“*我是王教师”、“*我是王副主任”と名のるのも不自然です。“老师、部长、主任”が名のりに使えるのはこれらが敬称だからであり、(27)~(29)の例はやはり自分自身に敬称を用いて名のっているのです。

聞き手との心理的同化

日本語の感覚では、自分に敬称を使うのはとても不思議な感じがします。しかし、よく考えてみると、日本語でも自分に敬称を使うことがあります。それは相手が子どもの場合です。例えば、サンタクロースが子どもに、

(30) はい、みんな、サンタさんだよ。

と言うことは不自然ではありません。しかし、サンタクロースが子どもの親に、

(31) あ、お母さんですか。初めまして。*私、サンタさんです。

と言うのは不自然です。警官も子どもが相手のときは自分のことを「おまわりさん」と言えますが、大人を相手にして自分のことを「おまわりさん」と言うのは不自然です。

実は、中国語でも自分に敬称を使うことができるのは「私は〇〇です」と名のりの場合に限られます。(32) (33)のように名のり以外の場合に自分に敬称を用いると、相手を子ども扱いすることになります。

(32) (教師が小学生に)

有不懂的地方，随时都可以来问老师啊。

(分からないところがあったら、いつでも先生に質問してくださいね。)

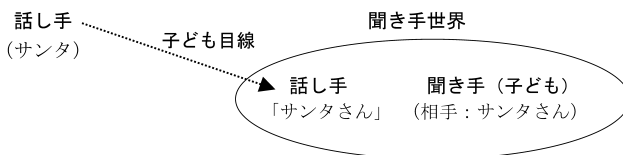
(33) (教師が生徒の親に)

对自己的孩子如果有什么不放心的地方，请和我（#老师）联系。

(お子さんについて心配なことがあったら、私（#先生）にご連絡ください。)

子どもを相手にして自分に敬称を用いるのは、心理的に子どもと同化した「子ども目線」の言い方です。子どもが自分のことを「サンタさん」と呼ぶので、話し手も子どもの気持ちに合わせて自分のことを「サンタさん」と呼ぶわけです。中国語の(32)で“随时都可以来问老师啊”（いつでも先生に質問してくださいね）と言うのもこれと同じ感覚です。

(34) 話し手自身に対する敬称使用（1）：聞き手との心理的同化



身内感覚にもとづく「呼称共用」

日本語では、名のりであれ名のり以外の場合であれ、自分に敬称を用いるのは相手が子どものときに限られます。自分に敬称を用いることにより、相手と心理的に同化していることを表すわけです。中国語でも、名のり以外の場合はこれと同じですが、「私は〇〇です」と名のる場合は事情が違って、相手が子どもでなくても、自分に敬称を用いることができます。

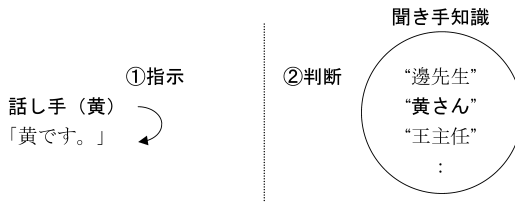
このことは、中国語の名のりにおいては「相手の知識の中にある自分を指している」と考えれば自然に説明できます。“我是老黄”を例にあげれば、相手の知識の中で自分は“老黄”（黄さん）という呼び方で存在しています。“我是老黄”と名のるのは、相手の知識に存在する“老黄”（黄さん）を直接指しているということです。

(35) 話し手自身に対する敬称使用（2）：身内感覚にもとづく「呼称共用」



日本語の「私は黄です」は、あくまで自分を指して言う表現です。相手はそれを聞いて、自分の頭の中の「黄さん」と判断する。中国語では「聞き手の知識の中の自分を指す」という一つの手順で済むところを、日本語では「①自分を指す→②相手に判断させる」という二つの手順をふむわけです。

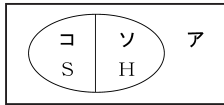
(36) 日本語の名のり（聞き手に判断要請）



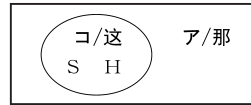
日本語で「*私は黄さんです」と言えないのも、日本語では相手の知識に存在する自分を直接指すことができないからです。「黄さん」という呼びかけ表現は、呼びかける側に使用権があり、相手の知識の中に存在する自分を直接指すことは（聞き手との心理的に同化する場合を例外として）相手の呼称使用権の侵害になるということです。これに対し、中国語では、「身内」の間柄では呼称は共用であり、自分に敬称を用いて相手の知識の中に存在する自分を直接指しても、呼称使用権の侵害にはなりません。名のりにおける敬称使用に関して、日本語と中国語は大きく違うように見えますが、実際は「敬称の使用が呼称使用権の侵害になる（日本語）ならない（中国語）」という一点が違うだけなのです。

このあたりは指示詞の体系とよく似たところがあります。日本語では、自分の領域にあるものは「コ」、相手の領域にある対象は「ソ」で指示します。「私のものは私の領域、あなたのものはあなたの領域」です。一方、中国語には「ソ」にあたる指示詞がなく、話し手と聞き手を含めた「我々」の領域（这）とそれ以外の領域（那）という区別をします。「私のものは我々の領域、あなたのものも我々の領域」という感覚です。中国語で「身内の間では呼称は共用」というのも、この延長線上にある感覚です。

(37) a.



b.



(S:話し手, H:聞き手)

ちなみに、この領域感覚の違いは、日本人と中国人の行動様式の違いにも現れます。日本人がものを渡すときは、「はい」とか「ん」のように何かサインを出すのが普通です。受け取るときも「どうも」とか「ん」のような了解のサインを出します。無言でものを渡したり受け取ったりすると、機嫌が悪いという印象を与えることがあります。日本人の感覚では「私の領域」と「あなたの領域」は別ですから、領域間での物のやりとりの際には「相手の領域に入る」、「自分の領域に入ることを許可する」というサインを出しあうわけです。中国人はもののやりとりの際に日本人のようにいちいちサインを出すことはしません。無言でものを渡したり受け取ったりしても、機嫌が悪いわけではありません。自分と相手は同じ「我々の領域」にいるわけですから、いちいち断ったり了解したりする必要がないのです。

敬称使用による「公共性付与」

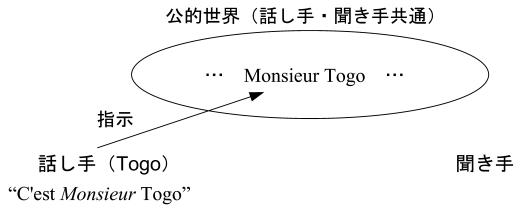
自分に対する敬称使用には、以上述べた「聞き手との心理的同化」によるもの（日本語の場合、中国語の名のり以外の場合）、「聞き手との呼称共有」によるもの（中国語の名のりの場合）のほかに、もう一つのタイプがあります。それはフランス語や英語の名のりに見られるものです。

フランス語では電話で名のるときに、

(38) Ici, c'est *Monsieur Togo*. (もしもし、こちら東郷です。)

のように言います。Monsieur は Mr. です。英語の辞書にも “This is *Mr. Smith speaking*.” (こちらはスミスです) のような例文があつたりします。これは心理的同化とも呼称共有とも違い、「公称」として敬称を用いていると考えられます。公的な世界では自分は “Monsieur Togo”、“Mr. Smith” なので、その呼称を使うということです。人名録に “Monsieur Togo”、“Mr. Smith” とあるのを指すというイメージで考えればよいと思います。中国語のように身内感覚で自分に敬称を用いるのではなく、あらたまった表現として敬称を用いるわけです。

(39) 敬称使用による「公共性付与」



「異文化」について考えるー日本と中国の場合ー

ここまで、対照研究をおこなう際に大切な二つのことを述べてきました。

①自分が実感できる事柄と関連づけて最大限具体的にイメージする。

②最小限の違いで説明する。(最大限同じと考える。)

この二つのことは「異文化」とのつきあい方について考える上でも重要です。私の妻は中国人です。結婚して22年になりますが、日本語も堪能で日本の生活にもすっかり溶け込んでいます。しかし、日常生活の中で異文化間摩擦がないかというと、そういうわけでもありません。ちょっとした違和感を覚えることはありますし、それが積み重なると多少ストレスを感じたりもします。それを解消するには、「こう考えれば少なくとも頭では理解できる」という見方を自分なりに見出す必要があります。上の①と②はそのための重要な指針になります。残りの時間では、そのことを日本人と中国人の違いとしてよく言われることを例にあげて述べたいと思います。

おしつけ vs. ひかえめ

日本人と中国人の違いが端的に現れることの一つに「おみやげ」があります。日本人は「スーツケースのすみにでも」と言って小さなものをおみやげにしたりします。「相手のことを考慮し控えめに差し出す」というイメージです。

中国人は違います。大きい（量が多い）おみやげをドンと渡します。中国でおみやげをもらったときは、スーツケースに入らず、荷物を全部出して最初から詰め直すこともあります。おみやげをもらってうれしいことは確かですが、見方によっては「相手の都合を考えずに一方的に押し付ける」というふうに見えなくもありません。次の(40)のようなイメージでしょうか。

(40) 中国

自分 → 相手

日本

自分 → ⇄ 相手

しかし、実際は、日本人が「スーツケースのすみにでも」と言うのと、中国人が大きい（量が多い）おみやげをドンと渡すのは、同じ原理——礼儀と言い換えてもよいと思います——に基づいています。それは、

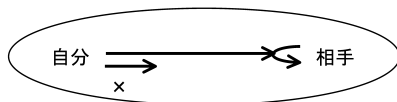
「相手が受けやすいように与えよ。」

ということです。日本人も中国人も「相手が受けやすいように与えよ」という原理のもとで自分の厚意を相手に伝えようとします。しかし、自分と相手との距離感や領域感覚が日本人と中国人で異なるために「相手が受けやすいようにする」ためにおこなうことが逆になる、というのがここでの見方です。

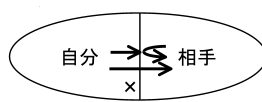
中国人は「自分と相手は離れている」という感覚が基本です。遠くにいる相手にボールが届くようにするには「えい！」と力を加えて投げないといけません。それと同じように、自分の厚意が相手に届くようにするには相応の力を加えることが必要というのが中国人の感覚です。中国人のおみやげが大きい（量が多い）のも、そうでないと自分の気持ちが相手に伝わらない（それは相手に対しても失礼）という感覚があるからです。

一方、日本人は「自分と相手は領域を接している」という感覚が基本です。目の前にいる相手にボールを渡すのに「えい！」と力を入れて投げたりはしません。自分と相手は領域を接しているので、適度に力を抑制して相手の前に差し出すほうが、相手もスムーズに受け取れます。「スーツケースのすみにでも」というのもそれと同じ感覚です。自分の厚意を相手に伝えるには、「相手に差し出す」くらいのほうが相手も厚意をスムーズに受け入れられるというわけです。(40)のイメージは、実際は(41)のようにとらえるべきだと思います。

(41) 中国



日本



中国人のおみやげが大きい（量が多い）のも、日本人のおみやげが小さい

のも、相手のことを考えてのことです。行動としては逆ですが、それはあくまで「相手が受けやすいように与えよ」という原理（礼儀）の具現化のしかたが違うというだけです。また、両者の違いもつまるところは自分と相手との距離感や領域感覚が違うというだけです。こう考えるようになってからは、中国人の大きなおみやげも「気持ちは分かる」と思えるようになりました。もちろん、頭で分かっても感覚や体がついていかないことはありますから、中国人と同じようにふるまえるわけではありませんが、頭で分かるというだけでもずいぶん気が楽になります。

率直で実質的 vs. よそよそしく形式的

「おしつけ vs. ひかえめ」に限らず、日本人のコミュニケーション、中国人のコミュニケーションを見ていると、原理（礼儀）は同じだがその現れ方が逆になるということが多いうに思います。「中国人は率直。日本人はよそよそしい」、「中国人の会話は実質的。日本人の会話は形式的」というイメージもそのような例だと思えます。

中国には“熟不拘礼”（親しければ礼儀にはこだわらない），“一家人不说两家话”（仲のよい間柄では他人行儀なことは言わない）ということばがあります。「親しければ境界なし」が中国人の感覚です。日本は「親しき仲にも礼儀あり」ということばがあるように、「親しくても境界あり」です。このあたりの感覚はずいぶん違います。

これに関連して、ある日本人女子学生が次のようなことを言っていました。

- ・友人の中国人女子学生の家にな自分が作った料理を持って遊びに行った。友人は料理を一口食べて「ちょっとしょっぱい」と言った。仲のよい友人なのに、そう言われてちょっとショックだった。

日本人の女子学生同士なら「親しき仲にも礼儀あり」で、多少しょっぱくても「おいしい」と言うと思います。それがいきなり「ちょっとしょっぱい」ですから、確かにショックだと思います。

しかし、ある中国人女子学生はこれとちょうど逆のことを言っていました。

- ・友人の日本人女子学生は自分が作った料理をいつも「おいしい」と言う。「おいしい」としか言わないのは口先だけという感じがして、友

だちではないような感じがしてくる。

その中国人学生によれば、仲のよい友人であれば「しょっぱい」と思ったらそう言うのが普通であり、言われた方も「次はもう少し塩を減らそう」と思う、あるいは「どれくらいがいい？」と聞き返したりするだけで、ショックを受けたりしない。逆に「おいしい」ばかりだと、率直な感想という感じがせず、よそよそしい感じがするのだそうです。まさに“一家人不说两家话”です。また、あいさつを初めとして、日本人の会話は定型的な表現が多く、中国人の会話に比べて形式的という印象があるようです。日本人は自分たちが「よそよそしい」とか「形式的」とは思っていないと思いますが、中国人の目には「中国人は率直で、日本人はよそよそしい」、「中国人の会話は実質的で、日本人の会話は形式的」と映ると思います。

しかし、「中国人は率直で、日本人はよそよそしい」、「中国人の会話は実質的で、日本人の会話は形式的」ということの背景にある原理（礼儀）は実は同じだと思います。それは、

「相手と自分の関係のバランスを保て。」

ということです。

先に述べたように、中国人は「自分と相手は離れている」という感覚が基本です。自分と相手の間でことばのやりとりがあると、自分と相手は「関係あり」で「我々（ウチ）」という感覚になりますが、ことばのやりとりがなければ互いに「関係なし」です。このような感覚のもとでは、「相手と自分の関係のバランスを保つ」とはすなわち「ことばのやりとりを継続する」ことにほかなりません。シーソーで遊ぶときは上下運動が続くようにすると同じように、ことばのやりとりを継続することで相手と自分の関係のバランスを保つ、それが中国人の感覚です。

一方、日本人は「自分と相手は領域を接している」という感覚が基本です。ことばのやりとりがなくても「関係あり」です。このような感覚のもとでは、「相手と自分の関係のバランスを保つ」とは「自分と相手の境界の状態を保つ」、すなわち自分と相手の均衡状態を保つことです。天秤がつりあっている状態を保つと同じように、自分と相手との間のバランスを保つわけです。中国人のコミュニケーションは「ことばをやりとりする」ことによって支えら

れていますが、日本人のコミュニケーションは、ことばのやりとりよりも「相手に気をつかう」ことによって支えられていると言ってもよいと思います。

このことと関係する体験談を一つ紹介します。北京の大学で1年間教えているときに西安に集中講義に行く機会があり、そのときに一人で“羊肉泡馍”を食べに行きました。“羊肉泡馍”は西安名物で、まず半生のパンのようなものを自分で細かくちぎって井の中に入れます。細かければ細かいほどおいしくなるので、ちぎったものをまたちぎって、ということを繰り返します。ある程度の量と細かさになったところで店員に井を渡すと、熱々の羊のスープを入れて持ってきてくれます。半生のパンがすいとんみたいな感じになって、なかなかおいしい。半生パンが意外に固いので、おいしくなるように細かくちぎるにはけっこう時間がかかります。当然、ビールを飲んで、料理をつまんで、パンをちぎって、となります。これがまた楽しい。

西安でそれをやっているときに、店員がテーブルに来て、「この人と相席をお願いできないか」と言ってきました。私と同世代ぐらいの男性でした。いいですよと言うと、彼は私の向かい側に座り、私と同じく、ビールを飲んで料理をつまんでパンをちぎって、を始めました。二人の男が一つのテーブルで向かいあって、黙々と、ビールを飲んで料理をつまんでパンをちぎって、です。

この状況は、私にとっては苦痛でも何でもありませんでした。相手のじゃまにならないように一応気をつかいながら、ビールを飲んで料理をつまんでパンをちぎって、をやっているのです、会話はなくても「相手と自分の関係のバランスを保つ」という形でのコミュニケーションは成立しています。むしろ、自分と相手の間の境界の状態を保つにはへたに話しかけないほうがよいという感覚です。これに対し、私の向かいにいる彼のほうはどうも落ち着かない。視線をどこに置けばよいかわからないという感じでした。別のテーブルの人たちは彼にとっても私にとっても「風景の一部」でしかないので「関係なし」ですが、一つのテーブルで向かいあって、ビールを飲んで料理をつまんでパンをちぎって、をやっているわけですから、互いに風景の一部というわけにはいきません。彼が視線をどこに置けばよいかわからないという感じだったのも、私が風景の一部ではないことと、私との間にことばのやりとりのないこととの間で矛盾を感じていたのだと思います。

「これは話しかけてくるな」と思ったら、予想通り「どこから来た?」と話しかけてきました。「北京だ」と答えると、彼も教育部（日本の文科省）

の役人で、留学関係の事業の説明会のために北京から西安に来ているとのこと。こちらでも当時は北京の大学で教えていたので、まんざら無関係ではありません。それで一気に距離が縮まり、後は食事をしながらおしゃべりです。

今から思えば、私のへたな中国語をよく聞き続けてくれたと思いますが、それもことばのやりとりがあるというだけで「我々（ウチ）」という感覚になるからだと思います。ことばのやりとりをすることが一種の礼儀だということです。「熟不拘礼」（親しければ礼儀にはこだわらない）、「一家人不说两家话」（仲のよい間柄では他人行儀なことは言わない）も、ことばのやりとりを継続するための戦略的なのだと思います。日本語に比べて形式的なあいさつが少ないのも、実質的なことを言ったほうが会話が続くからです。逆に、日本人に「親しき仲にも礼儀あり」という感覚があるのは、また定型的なあいさつが多いのは、へたにあれこれ率直に言って自分と相手の関係のバランスが崩れることを回避しているのだと思います。

「相手と自分の関係のバランスを保つ」ことに関する日本人と中国人のイメージは、次のように図示できます。「私の領域＝コ、あなたの領域＝ソ」、「我々の領域＝这」という指示詞の感覚との平行性を見てとることもできると思います。

(42) 中国（やりとりあり＝ウチ）

日本



「中国人は率直で、日本人はよそよそしい」、「中国人の会話は実質的で、日本人の会話は形式的」というのは、表面的には水と油のような関係に見えます。しかし、これらはいずれも日本人、中国人がそれぞれの感覚で「相手と自分の関係のバランスを保つ」という原理（礼儀）を形にしているだけです。また、両者の感覚の違いも、つまるところは自分と相手との距離感や領域感覚が違うというだけです。先に述べたように、頭で分かっても感覚や体はなかなかそれについていけないものなので、日本人と中国人のコミュニケーション様式の違いから来る互いの違和感がなくなるということはありませんが、日本人も中国人の感覚を互いに頭で理解すること自体はそう難しいことではないと思います。

開放的 vs. 閉鎖的

「相手と自分の関係のバランスを保つ」ことに関する感覚の違いは、「中国人は開放的。日本人は閉鎖的」という違いにもつながります。具体的には、中国人は知らない間柄でも「場を共有している」と思ったらしゃべるのが基本ですが、日本人は必ずしもそうではないということです。

しかし、実際は、日本人も中国人も「同じ場にいる人とコミュニケーションせよ」という原理（礼儀）は同じだと思います。先の「羊肉泡饅」の例からもわかるように、中国人は相手と場を共有している（相手は風景の一部ではない）と感じたら、話をするほうに動きます。ことばのやりとりがあって初めて「我々（ウチ）」という感覚になる中国人にとっては、ことばのやりとりのないコミュニケーションは考えられないからです。一方、相手と境界を接しているという感覚の日本人にとっては、ことばのやりとりがなくても、互いに気をつかうことで「相手と自分の関係のバランスを保つ」という形でのコミュニケーションは十分成立します。「中国人は開放的。日本人は閉鎖的」というよりは、何をもってコミュニケーションが成立するかという感覚が日本人と中国人で少し違うだけなのだと思います。

妻はいくつかの大学で中国語を教えています。講師室では他の先生方とおしゃべりをするようです。一方、日本人の先生方は、妻がいるときは話をされるようですが、妻がいないときはあいさつだけということもあるようです。妻にしてみれば、毎週顔を合わせているわけだから、話をするのが自然という感覚です。会話がないと相手を「関係なし」として扱うことになり、それは礼儀に反するからです。しかし、日本人の先生方にしてみれば、逆に、毎週会っているから会話がなくても特に気まずくならないという感覚ではないかと思います。逆と言えば逆ですが、どちらも相手のことを考えたコミュニケーションのあり方だと思います。

北京に住んでいるときにはこんなこともありました。ある日、街の中心部に向かうバスに乗ったら、妻がいつの間にか隣のおばさんとおしゃべりをしています。もちろんたまたま隣り合わせになったおばさんです。時間にして20分くらいだったと思いますが、バスを降りるときには電話番号の交換をしていました。日本人の感覚だと、電話番号の交換までするのは違和感がありますが、中国人の感覚では特に違和感はないようです。楽しく会話ができたという気持ちを電話番号の交換という形で表しているのだと思います。

はっきり vs. あいまい

最後に、「中国人ははっきり言う。日本人ははっきり言わない」というイメージについて考えます。これは日本人も中国人もそう思っているようですが、実際はそれほど単純な話ではなく、相手や場面によっては、中国人よりも日本人のほうが遠慮せずに言う（中国人のほうがかしこまって何も言わない）ということも少なくありません。ただ、全体としては「中国人ははっきり言う。日本人ははっきり言わない」という印象を与えることが多いことは確かだと思います。

しかし、そのような印象を与えることのほとんどは、日本人も中国人も「相手が次にものを言いやすいように言う」ということをやっているのだと思います。

まず、中国人がはっきり言うのは、相手が「次に何を言うか」を決めやすくするためです。将棋では、自分がどこかに駒を置かないと相手が次の一手を打てません。それと同じで、はっきり言わないと相手が「次に何を言うか」が決められない、それではことばによるコミュニケーションがスムーズに続かない、だからはっきり言う、というわけです。

一方、日本人がはっきり言わないのは、相手が「次に何を言うか」を自由に考える余地を残すためです。人に講演を依頼するときには、大まかな希望は伝えますが、細かい注文はつけずに、できるだけ講演者が自由に話せるようにするものです。それと同じで、はっきり言うことは相手の発言の幅を狭め、相手との関係のバランスを崩すことになる、だからはっきり言わない、というのが日本人の感覚だと思います。中村(1983)は日本人の言語行動について次のように述べています。

聞き手との関係を大切にする日本人の言語行動では、ものをはっきり言いすぎることを警戒する。あまりに明確な表現は、解釈の幅がないため、相手の判断をあおぐという姿勢に欠ける。つまり、送り手の考えるただ一つの意味を受け手が否応なく認めねばならないような的確な表現は、受け手の自主的な判断の余地を残さないの、相手に強く響くわけだ。そこで、あたりをやわらかくするために、何らかの「ぼかし」をもうけようとする。
(中村1983)

この感覚はとてもよくわかります。しかし、これはあくまで日本人の感覚

です。中国人も聞き手との関係を大切にします。聞き手に配慮するからこそ、相手が「次に何を言うか」を決めやすいようにはっきり言うのです。日本人も中国人も「相手が次にものを言いやすいように言う」という原理（礼儀）は同じであり、「次にものを言いやすい」ということとの感覚が少し違うだけなのです。

おわりに

日本人と中国人のコミュニケーション様式はいろいろな面で違います。当然摩擦も起きます。しかし、ここまで見てきたように、日本人と中国人のコミュニケーションは根本的な原理（礼儀）が違うわけではありません。原理（礼儀）は同じだが、コミュニケーションにおける「ことばのやりとり」の位置づけが少し違うというだけです。もちろん、この違いのためにいろいろな違いが出てくるわけですが、少なくとも日本人と中国人が互いの感覚を頭で理解することはさほど難しいことではない、という気にはなっていたただけたのではないかと思います。

もちろん、何度も繰り返すように、頭で分かっても感覚や体がついていかないということはあるので、異文化に完全に適応することはできません。しかし、「少なくとも頭では気持ちは分かる」と思うのと思わないのとでは、異文化とつきあう際の気持ちようがまったく違います。互いの幸福のためには、単に「慣れるのを待つ」というのではなく、自分なりに「比べて考える」ことを実践し、「少なくとも頭では気持ちは分かる」と思えるようになることが大切です。

今日の前半の話は、一見外国語の不思議な現象のように見えることも、「比べて考えて」みると意外に「なんだ、こんなことか」という感じで落ち着くことがよくある、という話でした。異文化とのつきあいもまったく同じだというのが今日の結論です。

付記：本稿の内容は、高知大学国際・地域連携センター国際連携部門主催講演会「文法の対照研究と異文化理解」（2011年6月25日（土）、高知大学朝倉キャンパス）における講演「文法の対照研究と異文化理解」に基づいている。

引用文献

相原茂ほか(2000)『中国語教室Q & A101』大修館書店

- 井上優(2006)「対照研究とは何か」、多和田眞一郎編『講座・日本語教育学6 言語の体系と構造』スリーエーネットワーク
- 井上優(2009)「話し手自身に対する敬称・愛称の使用について」『日中言語研究と日本語教育』2、好文出版
- 井上優(印刷中a)「言語場論からの接近：日本語から見た韓国語」『韓国語教育学講座』くろしお出版
- 井上優(印刷中b)「テンスの有無と事象の叙述様式－日本語と中国語の対照－」『日中理論言語学の新展望2：意味論』
- 井上優・生越直樹・木村英樹(2002)「テンス・アスペクトの比較対照－日本語・朝鮮語・中国語－」、生越直樹編『シリーズ言語科学4：対照言語学』東京大学出版会
- 尾上圭介(1999)「文法を考える7 出来文(3)」『日本語学』18巻1号、明治書院
- 黄麗華(2002)「中国語の肯定応答表現－日本語と比較しながら－」、定延利之編『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房
- 中川正之(2005)『漢語からみえる世界と世間』岩波書店
- 中村明(1983)「日本人の表現－その特殊性の行方を考える－」『講座日本語の表現5 日本語のレトリック』筑摩書房
- 浜之上幸(1992)「現代朝鮮語の「結果相」＝状態パーフェクトー動作パーフェクトとの対比を中心に－」『朝鮮学報』142、朝鮮学会
- 守屋宏則(1995)『やさしくくわしい 中国語文法の基礎』東方書店

いのうえ まさる
(麗澤大学外国語学部教授)